

久保 榮全集

8

久保栄全集

第 8 卷 翻訳

編集	宇野重吉	■久野 収
	武谷三男	■野間 宏
	羽仁五郎	■
解説	井上正藏	■北條元一
解題	内山 鵠	

三一書房

一九六二年四月二十五日 第一版発行

久保 栄全集 第八卷 定価一、四〇〇円

◎ 久保 マサ

一九六二年

検印
廃止

発行者 田 畑 弘

発行所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 東京 四九五八一―五番
振替 東京 八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 橋本製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

久保栄全集
第八卷

目次 第八卷

ウアウスト 悲劇二部作 (ゲーテ作)

献 辞 九

劇場内の序曲 三

天上のプロローグ 二五

悲劇 第一部

夜 三五

町の門の前 六

書 斎 八

書 斎 一〇三

ライプチヒのアウエルバハの窖 あなぐら 一三

魔女の厨 一四

街 一五

夕		一七〇
散歩道		一七九
隣の女の家		一八五
街		一九三
庭		一九七
園亭		二〇六
森と洞窟		二〇八
グレーチヒェンの部屋		二一七
マルテの庭		二三〇
井戸のはとり		二三六
城壁裏		二三三
夜		二三四
伽藍		二四四
ワルプルギスの夜		二四八
ワルプルギスの夜の夢		二五〇
曇り日		二六〇
夜		二六四
牢獄		二八五

悲劇 第二部

第一幕

麗わしい地域

帝城

玉座の間

脇の間の多い、入り組んだ広間

二九

三〇

三一

群

盗

五幕 (シラー作)

第一幕

第一景

第二景

第三景

第二幕

第一景

第二景

第三景

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

第三幕

第一景

.....

四五

第二景

.....

四八

第四幕

第一景

.....

四三

第二景

.....

四七

第三景

.....

四八

第四景

.....

四九

第五景

.....

四九

第五幕

第一景

.....

五〇

第二景

.....

五八

解題 (内山 鶏)

.....

五三

解説 (井上正蔵・北条元二)

.....

五七

悲劇

フ

ア

ウ

ス

ト

(ゲーテ作)

献 辞

また近づいて来たな、揺らめく影像の群れよ、
昔、おぼろげな瞳に時早く浮んだ幻よ、

今こそ、おまえたちを、しかと描きとめてみようか？

わたしは、まだあの大望に、こころ惹かれているのであろうか？

おまえたちは、群がり寄る！ では、よし、思うままに跳梁ちようりやうして、

かげろうと霧のなかから、この身のまわりに立ちのぼれ。

わたしの胸は、青春のようなきめきを覚える、

おまえたちの列をめぐる魔風に揺られて。

愉たのしかった日の憶い出を、おまえたちは身に纏まとって来る、

そこに、幾つかの懐かしい影法師も立ちならぶ。

半ば消えのこる、古い伝説のように

若い日の恋と友情が、ひとつに融けてよみがえる。

苦痛も新たに、また繰りかえすため息は、

迷路に似た人生の乱れた歩みを書きなぞり、
よい人びとの名を呼びもどす、美しい歳月としつきを賭けて
幸福に欺かれ、わたしを遺して次ぎつぎに滅びて行ったものの名を。

人びとは、つづく歌を聴いてはくれない、
彼らのために、わたしは首めはじの章をうたい起したのに。
親しい集いつどいも散ってあとなく、

今は消えはてた、ああ！ 最初の反響も。

わたしの歎きは、見知らぬ群のなかにひびき、

彼らの賞讃は、かえって心を不安にする、

昔、わたしの歌をよろこび聴いた仲間は、

なお世にあらうとも、散りぢりに世界の涯を踏み迷っている。

かくてわたしを捉えるものは、永く思い忘れていた
あの森厳な亡き魂なの国への憬れだ。

ここに、そこはかといない音をただよわせて

わたしの囁く歌は、エーオルスの豎琴を想わしめる、

ひとすじの戦慄に身をつらぬかれ、涙は涙につづき、

険しい心も、みずから和みなごやわらぐのを覚える。

今わたしの手にあるものは、さながら遠くに眺められ、
喪^{うしな}われたものこそ、わがための現実となるのだ。

劇場内の序曲

座長。劇場詩人。道化役。

座長

君方ふたりは、何時もわたしを、

困ったとき苦しいときに、助けてくれた、

早速だがね、およそドイツの国々で

こんどの企画が、先ずどのくらい当るだろう？

わたしの望みは、ただもう民衆を悦ばすことさ、

何しろ、みんなお互に、生き甲斐を感じ合おうというのだから。

柱も立ったし、板も張れた、

誰も彼も、華やかな開幕を待っている。

もう座について、もの見高く眉をあげ、

ゆったり構えて、さあ驚かしてくれと言わんばかりさ。

わたしにしたって、客の気もちを迎えるぐらいの工夫はつくが、

でも、こう迷ったのは、始めてだよ。

何も世間が傑作に慣れてしまったわけではないが、

ただ、先生たち、おそろしく本を読んでいる。

で、どうすればいいのだろう、すべてが新鮮で眼あたらしく
含蓄もあり、取りつき易くもあるというには？

無論、わたしは、あの群集が見たいのだ、

人の波が、小屋をめがけて打ち寄せる、

力まかせに押し合いへし合い

身をよじらせて、窄いお慈悲の門を通る、

まだ陽も高い、四時も打たない時分から、

喧嘩腰で、売場の窓へ漕ぎつけては

飢饉のさなかに、パン屋の戸口でパンでも奪い合うように、

たった一枚の切符のために、頸の骨さえ折りかねない。

こういう奇蹟を、あの種々雑多な群集のうえに現すのは

詩人だけだよ、さあ君、頼むぜ、今日も！

詩人

ああ、やめて下さい、あの色さまざまな群集の話は、

あれを見るなり、われわれの霊感は逃げて行ってしまう。

どうか蔽い隠して下さい、あの波のような雑踏を、

あれは、無理にもわれわれを渦のなかへ巻き込むのです。

いや、静かな天の片隅へ、わたしを遣って下さらんか、